

国際ICT利用研究学会 論文誌

Journal of International ICT Application Research Society

JIIARS

2020年 第4巻 第1号

November 2020 Vol.4 No.1

1

目次

巻頭言

赤い屋根の駅舎とオンライン授業 国際 ICT 利用研究会 理事 平 治彦	1
---	---

論文

14 万 7000 フライトの分析に基づく日本の主要空港発着便における欠航率の特徴 中村 洋介 (福島大学), 香内 彩夏 (ジャストトレーディング株式会社)	3
地理情報システムを用いた津波発生時における避難場所としての神社の有効性に関する研究 白木 洋平, 徳久 紗希, 北沢 俊幸 (立正大学)	10
初期平安京の復原 ～都城の思想と大型将棋の将棋盤～ 高見 友幸 (大阪電気通信大学)	18
デジタルゲームの RPA (序報) ～プログラミング教材としての活用～ 横山 宏 (大阪電気通信大学), 福井 昌則 (兵庫教育大学), 松本 貴裕, 高見 友幸 (大阪電気通信大学)	29

編集後記

国際 ICT 利用研究会 理事 佐久間 貴士 (千葉県立保健医療大学)	35
---	----

赤い屋根の駅舎とオンライン授業

国際 ICT 利用研究会
理事 平 治彦

私が通うオフィスがある JR 中央線の国立駅に、赤い屋根の駅舎が十数年ぶりに復元されました。一橋大学の最寄り駅ということもあり、赤い屋根の駅舎の改札口を通った思い出をお持ちの方も多いのではないでしょうか。

残念なことに、今年の春は駅舎の復活を喜ぶ間もなく、COVID-19 への対応の渦に飲み込まれることとなります。大学はいつ再開されるのかと心配していたところ、オンラインで授業を開始するらしいと言う話が続々と入ってきました。当初はオンライン授業は成り立つのか？と半信半疑な私でしたが、授業再開と同時に対応に追われるようになります。



昨年までは普通に利用できたシステムも、今年は何倍ものユーザが押し寄せ、しかも、授業開始時刻を目掛けてアクセスが集中してレスポンスが遅くなる、大量のレポートの提出でディスクの空き容量が急激に減る、などの問題が発生しました。その結果ご利用いただいている先生方には大変ご迷惑をおかけいたしました。

そのような中でも比較的短期間で対応ができた理由は ICT の恩恵と言えるものでした。

- 使いやすい Web ベースの会議システムが複数あったこと。
- 大きなファイルはクラウドストレージで共有できたこと。
- 仮想化基盤が一般化し、サーバリソースを融通してもらえたこと。

そして何より、授業を行う先生方の並々ならぬ熱意と努力があったからこそ、教育を止めることなく進むことができたものと思います。一方で今回の出来事は、凶らずも ICT の威力を見せつけたとすることができるのではないのでしょうか。

さて、国立駅の赤い屋根の駅舎が完成した 1926 年当時は、猛威をふるったスペイン風邪が落ち着いて一息ついているところに関東大震災による甚大な被害が発生、その復興の真只中だったと言います。悪夢のような状況が続く中、先人達の努力により、中央線の電化や

鉄道ネットワークの充実などが行われ、その後の街の発展に貢献し、今に至ります。

本学会においても、現代の情報ネットワーク技術を駆使した、次の100年後の教育に繋がる取り組みが多く成されていることは大変心強いことです。これらの研究成果が社会の発展に寄与する事を心から願っています。

略 歴

1996年 電気通信大学 電気通信学部 電子情報学科卒業

1996年 日本データパシフィック株式会社入社

2001年 株式会社ウェブクラス 代表取締役

2013年 日本データパシフィック株式会社 代表取締役

編集後記

新型コロナウイルス拡大の中、最前線で治療・感染防止・日常生活を支えてくださっている全てのエッセンシャルワーカーの皆様、そして会員の皆様に感謝申し上げます。急速に広まって世界的に生活を一変させてしまった新型コロナウイルス感染症、たった数カ月先のことすら予想できない、世界中がそのような状況になっているということは、大変な事態だと感じております。

この新型コロナウイルスの影響は、学会運営にも及んでおり、本学会において3月に千葉商科大学にて開催を予定していた第7回研究会は現地での集合開催を中止し、Web上でのオンライン開催といたしました。10月に開催した第8回研究会も同様にオンライン開催となりました。そして、毎年12月に開催する全国大会（IIARS2020）も今年度はオンラインでの開催となります。このようにオンラインイベントの開催、研究会や全国大会のオンライン開催への変更など、学会活動の維持・発展のための対応を刻々と変わる状況に合わせて他の理事の方々が進めてくださっています。また、学会の多くの方々が勤務先での具体的な対応を主導・実践していく立場であり、学会内で生まれたつながりが、その情報共有に活かしていると思います。

社会のあらゆる場面でオンライン化が急速に進んだのが今年の特徴だと思いますが、このような社会はコロナ禍以前から我が国が目指してきた姿でもありました。例えば、内閣府が進める科学技術・イノベーション政策の一つ「ムーンショット目標」では、「2050年までに、AIとロボットの共進化により、自ら学習・行動し人と共生するロボットを実現」することを目標としています。今や日常となったテレワークやオンラインがもたらすリモートワークは、「人が身体や空間から開放された社会」と言えるかもしれません。この新型コロナウイルスの影響により、奇しくもこのような社会実現が加速しているような気がいたします。

オンラインに基づく生活様式には便利さもありますが、一方で課題も増えてきたように思います。そのひとつが、人と人との「つながり」ではないでしょうか。教員も学生も、今年度は、オンライン上で人間関係を構築しなければならない状況でのスタートでした。「つながっているのに孤独」な状況がキャンパス内で広がっていたように思います。しかし後期が始まり、この状況も少しずつ緩和され、科目により、あるいは段階的に対面での授業が開始された大学もあると思います。情報だけのやりとりであればオンラインでも可能かもしれない。しかし、それだけでは再現できない五感を使ったコミュニケーションの大切さを痛感しております。今後もICTの整備が急速に整えられ、我々が想定していた環境が実際に標準になるのだと思います。このような事を念頭に起き、本学会がこのような知見を共有して、社会に貢献できるインフラになることを目標として、理事としての職務を果たしていきたいと思っております。

学事多忙の折にも関わらず投稿論文を査読してくださった先生方に、心より感謝とお礼を申し上げます。そして次号以降も、意欲的な研究成果のご投稿を心待ちにしております。

国際ICT利用研究学会 理事

千葉県立保健医療大学 健康科学部 講師 佐久間貴士

国際ICT利用研究学会論文誌 第4巻 第1号

Journal of International ICT Application Research Society Vol.4 No.1

2020年11月6日 発行

発行者 国際ICT利用研究学会論文誌 編集委員長 山下倫範

表紙デザイン 内藤慶恵

印刷 株式会社カンファレンスサービス

問合せ先 office@iiiar.org